

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K13065

研究課題名(和文)原子力発電所事故後の福島県における住民と医療従事者の相互行為

研究課題名(英文)The interaction between doctors and residents after the nuclear power plant explosion in Fukushima

研究代表者

黒嶋 智美(Kuroshima, Satomi)

千葉大学・文学部・日本学術振興会特別研究員(PD)

研究者番号：50714002

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、原発事故後の福島県において、内部被曝検査の結果を伝える診察場面、帰還地区の住民を対象としたインタビュー、座談会、帰還事業に携わる復興支援NPO団体の会議場面における相互行為を分析することで、放射能あるいは生活条件への不安・怒りなど、「慢性的な」感情が、具体的な相互行為の展開のなかでどう見出され、表出され、対処されるか体系的に記述することであった。会話分析の方法により、質問や説明の組み立て方と反応の仕方、発話の連なりの構造などの会話にみられる構造的特徴が、上の感情探索・表出・対処とどう関わっているかを明らかにした。現場の実践家たちに対し、相互理解達成の実践の可能性も示唆した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to analyze and describe the interaction of the radiation exposure test result consultation, interviews and roundtables with residents who were returning or remaining in the difficult-to-enter area, as well as the reconstruction support group meetings in the aftermath of nuclear power plant explosion in Fukushima. The study focuses on the ways in which "chronic" emotions towards the radioactive substances and living conditions after the accident are formulated, expressed, and dealt with by the participants. By drawing on conversation analysis as a methodological framework, it has examined the conversational practices for designing a question and its response and the organization of action sequence in order to elucidate how the emotions are come to terms with in those interactions. The implications for communication are also offered for those who participated in the study as well as the professionals in the related domains of professions.

研究分野：会話分析, 英語教育, 応用言語学

キーワード：会話分析 感情 東日本大震災 原子力発電所爆発事故 問題の語り 道徳性 復興支援 実践的推論

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、福島第一原子力発電所の爆発事故の影響のもとで、福島県および近隣に生活する人々がかかえる様々な問題に、医療的に取り組む医療関係者と住民たちとの相互行為に関するものとして当初計画されていた。これには、研究代表者が、研究協力者として参加した研究(基盤研究C 代表研究者 西阪仰 26380654)のなかで、すでにパイロット的に研究を進めていた、内部被曝検査の検査結果を医師もしくは病院職員が来院者もしくはその家族に伝える場面における相互行為の研究を継続し、さらにデータ分析の拡充をしていくことが予定されていた。しかしながら、様々な事情により、調査協力者の募集が困難であったため、この医療相互行為の研究では、それまでに取得したデータの分析の精度を高めることに集中し、それと同時に、帰還事業が進められている福島県内のある行政区域の再生、復興に関する相互行為の研究にあらたに着手していくことにした。具体的には、上記の基盤研究においても調査への参加をお願いしていた復興支援 NPO 団体による、復興支援のための事業に関する会議場面の相互行為分析、および、帰還地区に住む住民へのインタビュー、および座談会の相互行為分析であった。

これら3つのデータに基づく研究の間に直接的な関連はないが、私たちの社会がこれまで経験したことの無い事故の影響のもとに、ひとつのコミュニティのなかで不安や怒りなど様々な感情を抱えながら生きる人々がどのように問題を認識し、捉え、その解決に対してどのような実践を取り入れているのかという共通の問題意識はある。とはいえ、この研究は、あくまでも医療、復興、地域再生、そして人々との相互行為に関する社会学的研究である。このような研究は、J・ヘリテージやD・メイナードらを中心に、さまざまな医療実践にかかわる相互行為の厚い記述の蓄積がすでにある。一方、上記の内部被曝検査に取り組む医師からのヒアリングにて、内部被曝検診においては、通常の医療相互行為とは、明確に異なる側面のあることが指摘されていた。それは、いわば(事故とはいえ)「人為的に」拡散された放射性物質への怒り、悲しみ、諦念の感情が、診察においてしばしば伝わってくるということであった。このような感情は、会話分析に基づく経験的研究において、様々な資源によって(たとえば、発話のデザインや音韻などの産出の仕方など)、スタンス(態度)として示されることが実証されている。これらの「感情」に関する先行研究をふまえつつ、放射線に対する感情がどう示され、それが医師によりどう志向され対処されているのか、詳細に記述することが相互行為分析の新たな切り口となることが期待される。例えば、医師は、検査結果の数値から安全であることを来院者に伝えるとき、来院者の放射線に対する感情によって、その

受け止め方がまったく異なることが予想できる。このようなやりとりの構造的特徴をできるだけ多く記述することが目指された。また、こうした相互行為のなかで表明される放射能物質に対する感情は、医療場面だけではなく、帰還住民の日常生活にも深く関わっていることが容易に予想される。住民らへのインタビューや座談会のなかで、また復興支援を実践していく支援者たちの取り組みの中で、そうした当事者らの感情はどのような相互行為の構造や資源に支えられ表明されるのかについても記述していくことが本研究の重要な課題であった。

原子力発電所の爆発事故という、社会がいままで経験したことの無い事態のあと、多くの住民たちが、人為的に拡散された放射線に不安を感じながら生活を送っているという事実がある一方、事故から3年以上経過し、現地から(物理的距離としては極めて近いが)心理的に「遠く離れた」場所で、この単純な事実がほとんど忘れられている現実があった。そのため、本研究では、この事実に向き合う、住民自身、医療従事者、復興支援者らの意志と試みを、できるだけ正確に記録し、それをコミュニティ復興再生の提言につなげていく必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

以上の経緯をふまえ、次の二つの研究課題を設定した。

(1) 内部被曝検査の結果を伝える診察場面、帰還地区の住民を対象としたインタビュー、座談会、帰還事業に携わる復興支援 NPO 団体の会議場面、における相互行為を分析することで、放射能あるいは生活条件への不安・怒りなど、「慢性的な」感情が、具体的な相互行為の展開のなかでどう見出され、表出され、対処されるか体系的に記述する。会話分析の方法により、質問や説明の組み立て方と反応の仕方、発話の連りの構造などの会話にみられる構造的特徴が、上の感情探索・表出・対処とどう関わっているかを明らかにする。

(2) 医療従事者、復興支援者、および住民たちに対し、相互理解の達成を目指す様々な実践の可能性を示唆すると同時に、感情の社会学やリスク・コミュニケーション研究への貢献も目指す。

### 3. 研究の方法

サククスやシェグロフらにより開発された会話分析の方法を用いる。会話分析は、実際の相互行為の録音・録画にもとづき、相互行為参加者自身がどう相互行為を組み立てているかを、詳細に明らかにする研究方法である。人びとの生活の現場における相互行為の組織を具体的に研究するための研究手法としては、会話分析は最も洗練された体系的な方法である。つまり、会話分析は、住民たちの微細な感情が相互行為のなかでどう表われ

るかに焦点を絞る本研究にとって、最も適切な手段である。また、その成果を現場に還元していくという態度は、会話分析と歴史的につながりが深いエスノメソドロジー研究における「強い固有適合性要請」と関連がある。つまり、本研究の記述によって明らかにしていく具体的なものは、それ自体にとってのなんらかのインストラクションになりうるものでなければならないという要請に応えることである。具体的な手順としては、上記の場面の実際の相互行為の録音・録画を(わずかな間合い、言葉の重なり、身体の動きを含めて)詳細に書き起こす。それにもとづき、相互行為参加者が、みずからの相互行為をどう組織しているのかを記述していく。そのため、まず、研究フィールドに赴き、相互行為のビデオ収録を行なう。その文字化と分析を進めるとともに、共同研究者間でのデータ検討会や、海外からの会話分析の第一人者を招いてのセミナーを開催する。また、調査協力者らとの意見交換会も随時行なう。2年目には、積極的に国内外の学会において研究発表を行なうとともに、国内外の学術誌に向けた研究成果の発信も行なう。

#### 4. 研究成果

本研究で明らかにすることが出来た具体的なやり方は、医師による甲状腺内部被ばく検査結果の「先取り」によって、「悪い知らせ」にまつわる一般的期待による来院者の不安への対処がなされていること(論文業績)や、医師がデータの説明を、検査結果を導き出した医療推論のための各論として提示し、導出可能な解釈を実演することで行っていることなどが見出された(論文業績)。これらのうち、ここでは、(1)内部被ばく検査結果通知場面において語られる不安とその道徳性(論文業績からの引用)、(2)復興支援NPO会議場面に見られる住民の意向を把握する方法、(3)コミュニティの問題について語る、について詳しく述べる。

##### (1) 内部被ばく検査結果通知場面において語られる不安とその道徳性

心配は道徳的に制約されている。一般的に、小さいことでいつも心配する人は、しばしば非難されるかもしれない。一方、心配の道徳性も、局所的に相互行為に持ち込まれうる。たとえば、心配が表明されたあとその理由が問われるならば、その心配が理由説明の必要なものと扱われたと聞かれる場合がある。断片(1)は、その例である。この断片に先立ち、来院者は、自身の母乳内の放射性物質についての心配を表明していた。医師は、1~2行目において、その理由を「どうして」という形で問うている。

##### (1)

1 医師: ↑んん::ん .hhh 結↓こう  
2 なんなんだ その< 母乳がすぐ

3 い心配ってというのはどうして  
4 し心配だっ↓の↑?  
5 (0.8)  
6 来院者: ああ::: p すごく <し心配  
7 って> いったら変なんですけ  
8 ど[:::  
9 医師: [°ん::ん\_°  
10 来院者: [あ:::  
11 医師: [w-b-ぼ-ぼ-母にゆうがとくに  
12 心配だっ↓た理由ってとくに  
13 なんかある↓か[(な)  
14 来院者: [ああ.hh やっ  
15 ぱり こ- 赤ちゃんってこう  
16 (.)な↓んていうんですか↓ね

医師の問いに答えるにあたり、来院者は、自分の心配が「変」である可能性に言及している(7行目)。あるいは、心配の強さ(「すごく」)を打ち消すことから始めている。つまり、理由説明を求める問への返答において、「すごく心配」であることが必ずしも適切でない可能性への志向、すなわち心配の道徳的な適否への志向が表われている。実際、医師は、その志向を見てとり、来院者の発言を遮りつつ(来院者は10行目で「あの一」と何かを言い始めている)11行目で最初の問いを言い換える。この言い換えは、次の点で特徴的である。最初は「どうして」と問うていたのに対し、今度は「理由ってとくになんかあるか」と尋ねている。すなわち、新たな問は、理由説明を求めるものではなく、むしろ理由の有無を尋ねるものとなっている。理由の有無を尋ねる問は、理由説明を求める問と異なり、理由の存在を前提としない。それは、そもそも「理由がない」という返答を許容する。同じ理由に関する問であっても、心配の理由説明を求める問は、その心配が理由説明されるべきものであること、したがって、それが通常のものではかならずしもないことを含意しうるのにたいして、理由の有無を尋ねる問においては、そのような含意は弱められる。実際、言い換えられた質問に対しては、来院者は、理由だけを述べ始める(14~16行目)。理由説明の要求により心配の道徳性が相互行為にもたらされうること、このことに医師自身が敏感であることを、医師の質問の言い換えを通して見て取ることができよう。

##### (2) 復興支援NPO会議場面に見られる住民の意向を把握する方法

復興支援団体のミーティングでは、具体的な支援方針の決定や提案をする際、支援者らが住民の考えや意向などを推し測ったり、ふまえたりする場面がしばしば観察される。そこには、提案や意思決定を、常に住民の立場に立って行おうとする、支援者側の態度が見て取れる。復興支援団体として地域住民と日常にかかわり支援活動を行っている者だからこそ感情移入や想像が可能な住民の考えや思いが様々に表現されているように見

える一方で、じつは推測のひとつひとつが論理的に筋の立つロジックに則っていることも細かく検討すると見えてくる。住民の考えや思いを論理的に推測することで、把握の仕方に妥当性を持たせつつ、そうすること自体が、住民に「寄り添った」支援を行なうという応援隊の方針実践の反映にもなっているといえるだろう。通常、私たちは相手がどういう考えや思いを抱いているのかを常に相手に確認しているわけではないし、いつもそれを見たり聞いたりすることが可能なわけでもない。それでも私たちは、日常的に他人の行動を観察して様々なことを推論し、それをもとに他人の意向や心境を推測したりしている。

次の断片(2)では、住民Aが経営している食事処で、支援者たちがインターンとして昼食時に業務補助に入っていた活動を、いつまで続けるべきなのかについて話し合っている。その中で、タナカは、自分たちがある問題を住民Aに対して引き起こした可能性を示唆する(11行目「困らせてしまったかな」)ことで問題提起を行なっていく。タナカはその問題の内実が自分たちがインターンを止めることに起因することを敷衍するのだが、その際、タナカは、応援隊がインターンをやめた時の住民Aの意向を推測している。まず、14行目で「ミカさんとしては」と、これから語ることが、住民Aを主体とする位置づけがなされる。そしてさらに、「来てくれて」で住民Aの視角を維持しつつ、その上で、「今月末でやめる」ことが「いきなり」決まると、「あれかな」(15~22行目)と、住民Aにとって自分たちの対応が問題になりうることを推測している。

(2) rsg 2-1[00:10:11.165]

- 01 タナカ： まあいつまでんーん、まあ  
 02 サトウ： うん  
 03 タナカ： 決まっていなかったんで、言  
 04 えなかったんですけど、ち  
 05 よっとなんか、  
 06 (0.8)  
 07 タナカ： °なんですかね、°  
 08 (2.0)  
 09 ヤマダ： ((cough))  
 10 ムカイ： [そうね  
 11 タナカ： [困らせてしまったの°かな  
 12 っていうかなんか、°(0.5)  
 13 それで、(0.5)‘と：なんか、  
 14 ミカさん：としては：：、  
 15 その：今週で：、°じゃない  
 16 °先週で終わったと思って  
 17 たのに来てくれて、(0.2)  
 18 で：：もう、今月末でやめ  
 19 る：↓みたいな感じでいき  
 20 なりなったらなんか：、  
 21 (0.8)いきなり過ぎて<あれ  
 22 かな>って°思っ’っ  
 23 [たんですけど°

- 24 ムカイ： [うんうんうん、[なるほど  
 25 タナカ： [°(まあでも°)

21 行目でタナカは、「いきなり過ぎてあれ」という、指示語を使い、問題になることのみを表明している。ここであえて問題の内容を具体化しないことで、聞き手にこの発言が、自分たちのしようとしていることが住民Aにとってどんな影響をもたらすのか判断するように促しているように見える。それは以下のようなロジックによってである。まず、この発言の大前提となっているのは、「親密な人との交流がなくなるのは寂しい」というような一般的な通常の人間関係のあり方だろう。そして、住民Aにとって自分たちは親密な間柄にあるという共有知識が前提として動員されることで、自分たちがやめてしまうことは住民Aにとって寂しいことであるという結論が得られる(表1)。

表1：意向推測のためのロジック

大前提	小前提	結論
親しい関係にある人との交流がなくなるのは寂しい	住民Aは自分たちと親しい関係にある	住民Aは自分たちとの交流がなくなるのは寂しい

つまり、大前提である一般的な人間関係のあり方に、住民Aと自分たちの関係性があてはめられており、住民と自分たちが通常の支援者 被支援者ではない関係性にあることが前提とされているのである。また、この直前でなされた、住民Aはタナカがインターンに来たことを、終わったと思っていたので、(その再訪を)なおさら喜ばしいこととして受け止めていたという事実の報告は、この住民と彼らが親しい関係にあることをよりよく示すものでもある。ここでは、住民の意向を主眼に置き、自分たちの関係性をもとに考えることで、自分たちの対応が住民Aにとってどのように問題になるのかが、論理的に示されており、問題提起に説得力が与えられているともいえるだろう。受け手のひとりであるムカイが、24行目でこのタナカの問題提起に同意したあと、すでにその問題に対しては策が取られていることを伝えていくように(転記はなし)、タナカが訴えた問題の妥当性自体は他のメンバーによっても認められていたことがわかる。

### (3) コミュニティの問題について語る

帰還地区の住民は、座談会形式のインタビューにおいて、風評被害、人口流出、減容化施設建設反対など、原発事故後の避難から帰還を経るなかで生じた、コミュニティ全体にとっての問題を様々な切り口で語ってくださった。そのような「コミュニティ全体にかかわる問題の語り」は、たいてい、つぎのような2段階の構造になっていた。話し手は、

インタビューの聞き手が質問してきた内容に対し、1) それがいまどういう状態にあるのか評価したり、報告したりする中で、それを自分(たち)自身が問題視していることだけをまず最初に示唆する。次に、聞き手がそれを受け止めると、2) 自分(たち)がなぜそのことを問題視しているのか、どのようにそれが問題であるという認識を持っているのかを具体的に説明する「問題化」が行われる。そして、そのような問題化は、様々な一般的な論理にもとづいてなされている。コミュニティ全体についての問題について話さい、その内容だけが語られるのではなく、「問題化」も行われるのは、たとえコミュニティ全体が抱える問題であっても、捉え方は様々である可能性があり(ある人にとっては問題でも他の人にとってはそうでもないこともありうる)、住民の方がおのおの、問題を自分の視点、考えにもとづいてそれを捉えていることを示唆しているだろう。そして、それがインタビューの聞き手に対しなされている点も興味深い。質問された様々なことがらに対して、それを直接経験し、知識を持つ者として、現状を評価、報告し、問題化していくことで、語り手として期待されたふるまいをしている。住民たちによるこうした問題の語りは、聞き手の質問をきっかけに引き出されていくものであることも見て取れる。

次の事例(1)で聞き手は、震災前後や帰還が始まって以来、「コミュニティ」にのっての「近隣とのつながり」に「変化」があったかどうかを尋ねている(1-9行目)。聞き手による「変化とかがありますでしょうか」という聞き方は、あえてそのこと自体を問題として扱うことを前提としていない。しかし、これに対する住民Aの応答(10-26行目)は、いささか複雑に組み立てられており、以下の4つの点で彼がそのことに問題意識を持っていることが示唆されている。1) 聞き手の示した「近隣とのつながりの変化」はマスコミからもよく尋ねられるほど一般的に考えうることであるという特徴づけをし、対比的に位置づけることで、そのような捉え方とは異なる自分の見解があること。2) 「前と同じような形の付き合いしてる」ところもあるが、「集落全体」でみると、以前のようなではなくなってしまうという、質問に対しては同意出来る応答であるにもかかわらず、率直に答えられない複雑な状況にあること。3) 聞き手の使った「つながり」という客観的に関係性を表わす表現を「付き合い」に言い換え、自分たちの日常的な行動にひきつけることでそうした変化の認識を当事者として持っていること。4) 「やっぱり前ほどの形っていうのはなくなっちゃってるのかなど(いう)感じ」と、住民同士のつきあいを評価することで、「変化」を自分が直接経験しているということ。ただ、ここではまだ、住民Aの目から見た「変化」とそれに対する問題意識があることは示唆されているが、その内実は明

かされてはいない。

- (3)
- 1 聞き手: あの:ま、震災前と比  
2 べて:あるいはその:ま2年ぐ  
3 らい前から:、その帰還がはじ  
4 ま- 徐々に始まっていたその  
5 当時と比べて::何かそうい  
6 うコミュニティ-といひます  
7 か、その、いわゆ- 近隣とのつ  
8 ながりみたいなことが何か変  
9 化とかがありますでしょうか。  
10 住民A: ね、よく、まあね、マスコミ関  
11 係辺りからは(h) huh- しょ(h)  
12 っち(h)ゆう聞かれるけども、  
13 聞き手: ああ::  
14 住民A: ま、ま:えから、比:べれば、や  
15 っぱその- ま、付き合い::の形  
16 の状態でね、  
17 聞き手: ええ:  
18 住民A: なんかこう::本当、m- 前と同  
19 じような形の付き合いして  
20 る::とこもあるし::、  
21 聞き手: ええ:  
22 住民A: ただ::この::集落的な形の  
23 状態全体的な形を考えると、や  
24 っぱり前ほど::の形っていう  
25 のはなくなっちゃってるのか  
26 など(いう)感じですね  
27 聞き手: ああ::、そうなんですね。  
28 聞き手: なるほど。  
29 住民A: でやっぱ、何か行事を持とうと  
30 いう形の状態で、やっぱり、  
31 遠くにいる人:もいっちゃうと、  
32 聞き手: はあ、はあ  
33 住民A: そんなに集めてもなというし  
34 聞き手: ああ、そうなんですね。  
35 住民A: うん、やっぱ::中にはおらは遠  
36 いんだからっていう、  
37 聞き手: ああ、はあ、はあ、はあ  
38 住民A: まあいう人もいるし::

このような含みを持つ応答がいったん聞き手によって受け止められてから(27,28行目)、住民Aはさらに続けて、29-38行目で、今度は自分が経験している「変化」についての問題的側面を実証するような事実を提示していく。ここで語られているのは、「何か行事」という、集落が協働で行うような活動のさい、「遠くにいる人」を「集めても」仕方がない、「おらは遠いんだから」来れないなどといった他の住民による発言があったという事実の報告である。しかし単なる報告ではなく、発言内容を直接引用することで、実証性の高い証拠として、「集落が前ほどの形」ではなくなっていることを具体的に説明するものである。このようにして、住民Aは、先に示唆した、人との関係性の変化についての問題認識には、裏付けがあることを示し、いわば、人間関係の変化を「問題化」しているといえ

るだろう。そしてこれは、住民たち自身が行事などの際に町外へ移動した住民を集める意思がそれほどないことや、遠いことを理由に参加しないようになってきている住民もいることがあるために、前のような付き合いの形ではなくなってきているという、人付き合いに関する一般的考え方に基づくものともいえる。そこにはまた、この問題が、避難生活を機に町の住民があちこちに移動したことに起因するということも前提として含んでいる。この語りは言い換えれば、この住民が経験しているコミュニティの変化がどのような意味で問題として認識されうるものなのか、その根拠となる具体的な証拠でもある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

Nishizaka, Aug. 2017. The moral construction of worry about radiation exposure: Emotion, knowledge, and tests. *Discourse & Society*, 28(6) [掲載確定]. 査読有

須永将史, 黒嶋智美. 2017. 「内部被ばく献身結果報告におけるケア実践の相互行為分析」『社会学研究科年報』24巻, 7-18. (査読無)

西阪仰. 2017. 「知識と心配の道徳性—内部被ばく検査報告を語ること/聞くこと」岩上真珠・池岡義孝・大久保孝治編『変容する社会と社会学』学文社 (pp. 101-123).

Satomi Kuroshima, Natsuho Iwata. 2016. On displaying empathy: Dilemma, category, and experience. *Research on Language and Social Interaction* 49(2), 92-110. (査読有)

[学会発表](計8件)

黒嶋智美. 2016. 「内部被ばく検査通知診療場面における医師による説明：教示者としてふるまうこと」10月8日～9日第89回日本社会学会, 九州大学

須永将史. 2016. 「内部被ばく検診結果報告の相互行為における身体性と発話 医療場面におけるケア実践の相互行為分析」10月8日～9日第89回日本社会学会, 九州大学

Satomi Kuroshima. 2016. “Intonation and social actions: L1 transfer of pitch contour in Japanese EFL settings” JACET 55th International Convention, Sapporo, Japan, September 1-3.

Satomi Kuroshima & Yukio Oshiro. 2016. “Practical Reasoning in Recognizing the Structural Organization of the Human Body in Surgical Operations” 111<sup>th</sup> Annual Meeting, American Sociological Association (ASA), Seattle, WA, USA, August 20-23.

黒嶋智美. 2015. 「『見ること』についての語りの組み立て 外科医による血管と臓器の確認活動の会話から」, 第36回日本社会言語科学大会, 京都教育大学, 9月5日

Satomi Kuroshima & Juli Yamashita. “Formulating simulations: Describing the objects and actions in simulated medical settings” 12<sup>th</sup> Conference of the International Institute for Ethn methodology and Conversation Analysis (IEMCA), Kolding, Denmark, August 4-7.

Satomi Kuroshima. 2015. “Reading aloud: The practice of reading a label in the service environment”, 14th International Pragmatics Conference (IPrA), University of Antwerp, Antwerp, Belgium, July 26-31.

Satomi Kuroshima & Lorenza Mondada. 2015. “Participating without speaking the language of the encounter: On multimodal action formation for participation”, Language and Bodies in Interaction, University of Basel, Switzerland. June 24-27.

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

黒嶋 智美 (KUROSHIMA, Satomi)

日本学術振興会・特別研究員(千葉大学)  
研究者番号: 50714002

(2)研究分担者

西阪 仰 (NISHIZAKA, Aug)

千葉大学・文学部・教授  
研究者番号: 80208173

(3)連携研究者

早野 薫 (HAYANO, Kaoru)

日本女子大学・英文学部・准教授  
研究者番号: 20647143

小宮 友根 (KOMIYA, Tomone)

東北学院大学・経済学部・准教授  
研究者番号: 40714001

岩田 夏穂 (IWATA, Natsuho)

政策研究大学院大学・政策研究科・准教授  
研究者番号: 70536656

(4)研究協力者

須永 将史 (SUNAGA, Masafumi)

立教大学・社会学部・助教  
研究者番号: 90783457

小室 允人 (KOMURO, Masato)

千葉大学大学院・大学院生